

研究テーマ：遠隔共創コミュニケーションツールの開発(1/2)

(プロジェクト番号 JGN2-A19004)

研究機関： NEC C&Cイノベーション研究所

研究の概要：

高精細映像を送受信可能な大画面遠隔コミュニケーションツールの実装を行い、NEC C&Cイノベーション研究所とNICT 知識創成コミュニケーション研究センターとを接続して、使用感を測定した。長時間接続して実物大に投影することで心的バリアが軽減され、遠隔地の部屋が隣の部屋であるかのように感じることができ、また、遠隔地にいるメンバーの様子を意識せずに把握したり、気軽に話しかけたりすることができることが確認できた。

研究の目的：

・現状のテレビ会議システム

・大画面遠隔コミュニケーションツール

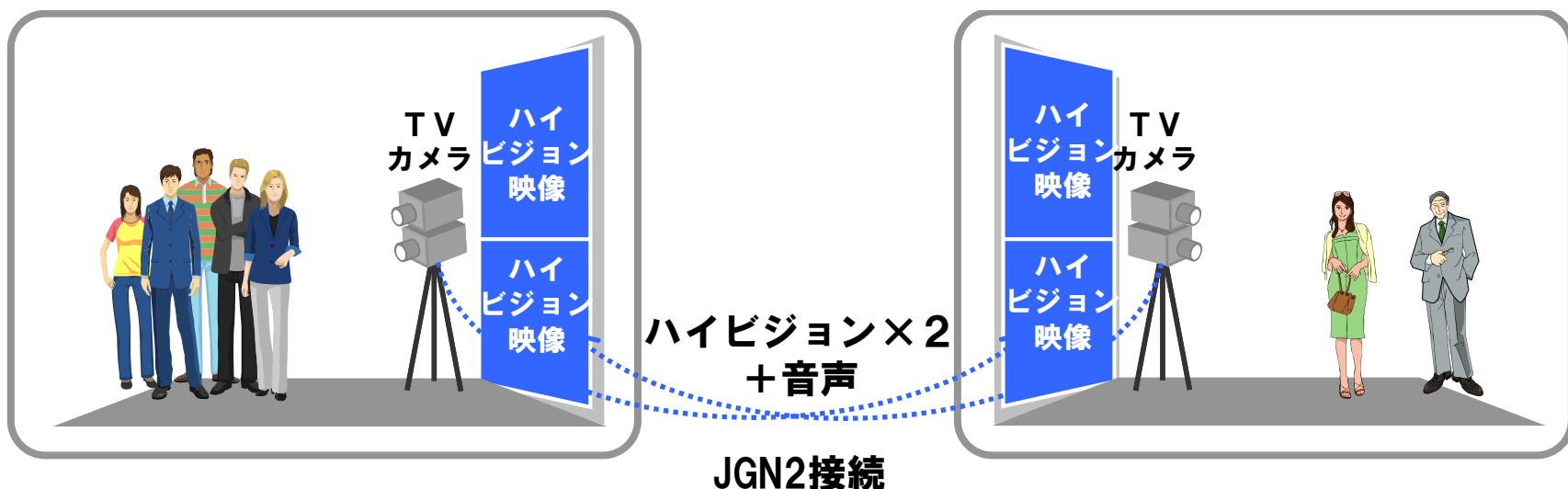


現状のテレビ会議システムにおいて生じる、意識的な参加を行わなければ遠隔地の情報を得ることができないという問題や、遠隔地の相手に話しかけることに対して心的バリアが存在するという問題の自然な解決を目的とする。

実験機器構成：

NEC C & C イノベーション研究所

NICT 知識創成コミュニケーション研究センター



- ・ NEC C&C イノベーション研究所と NICT 知識創成コミュニケーション研究センターとを JGN2 で相互接続
- ・ ハイビジョン×2段の高精細映像を縦 2.25m、横 2m のサイズで投影

研究テーマ：遠隔共創コミュニケーションツールの開発(2/2)

(プロジェクト番号 JGN2-A19004)

研究機関： NEC C&Cイノベーション研究所

研究開発成果：

遠隔地の映像を送受信し実物大で投影することができる大画面遠隔コミュニケーションツールのプロトタイプを作成し、このツールを使用して、NEC C&Cイノベーション研究所とNICT 知識創成コミュニケーション研究センターとを継続的に接続した(右図参照)。遠隔地のラボが隣の部屋にあるかのように感じることができ、心的バリアを弱めることができた。それによって、遠隔地で行われている会話に抵抗感なく参加することや、ローカルで話している内容について遠隔地の人間から自然に意見を聞きだしたりすることができた。また、スクリーンを注視せずに、遠隔地の様子をローカルと同様に目の片隅で捉えて無意識的に情報を得ることが可能なことが確認できた。



プロジェクトのアピールポイント

- 継続的に接続することによって、遠隔地との繋がり感が上昇する
- 実物大の映像を投影することによって、あたかも部屋がつながっているような感覚になり、繋がり感がアップする
- 上の2点により、遠隔地に対する心的バリアを弱めることができる

プロジェクトの自己評価

実物大の映像を継続的に投影することによるユーザへの効果を確認することができた。ただ、実験を開始してからの期間が短く、まだ長期間継続的に接続する実験は行えていない。今後は、長期間継続的に接続することによる効果を実験によって明らかにするとともに、関連情報の提示など、遠隔コミュニケーションをより効果的に支援することができるシステムの開発にも取り組んでいきたい。